

---

**【習作】 IS～インフィニット・ストラトス～ その男、定義を破壊するもの**

表裏一体

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

【習作】 IS(インフィニット・ストラトス) その男、定義を破壊するもの

### 【Nコード】

N2347X

### 【作者名】

表裏一体

### 【あらすじ】

好奇心の隷僕だった彼は、それゆえに過度の肉体疲労で死亡する。しかし目が覚めると、スラッダーIIハニーサックルの姿で、未来の世界で目が覚める！ この小説は不定期更新、見切り発進の更新の問題の他、チート、アンチ要素、魔改造、キャラ崩壊、多作品クロス、原作崩壊等の問題も数多くあります。それでもよろしければ是非読んで下さい。

## 序章 その話、未来（前書き）

初めての方は初めまして、『ネギ兄』を読んで頂いている方はごめんなさい、表裏一体です。

この小説は不定期更新、見切り発進の更新の問題の他、チート、アンチ要素、魔改造、キャラ崩壊、原作崩壊等の問題も数多くあります。

……それでもおk？

おkならばどうぞぞ！

## 序章 その話、未来

これは、そう遠くない未来の話だ。

世界規模の財政恐慌があり、世界規模のテロがあり、世界規模の戦争が起こりそうになった。

だが、そんな波瀾万丈な世界でも人々は多くの美談を作り、多くの悲劇を作り、多くの善があり、多くの悪があり、多くの戦いがあり、多くの平和があり、常に動き続けたのは言うまでもない。

そしてそんな世界を生き延びた多くの人々は、再び安寧の時を得ようとした。が、世界はそんなに甘くはなかった。

人口の増加。そして資源の枯渇化。

人々は自分たちが住める大地に所狭しと住んでいる。昔は田舎と行われた場所にも、人は多く住んでいる。少子化問題、と叫ばれていた日本でもその現象は起こった。それが世界レベルになれば、お分かりかな？

そしてそれによって人々は多くの資源を使うのも、当然である。最もな例が、金属、ガス、石油といったものか。大地もその資源の一つといえる。只でさえ以前から無くなってきていると言われているのだ。更に消費量が増えたら無くなるのは当然のこと。

人々は、生きながらえるためにも考えた。

人が住める場所、多くの資源がある場所、そして何より、他の国がまだ手を着けていない場所。

ならば、一つしかない。

人々は、上を見上げた。

宇宙だ。

人は手を伸ばし、背を伸ばし、必死に掴もうとしている。

だが、届かない。

だから、各国は始めた。

宇宙進出技術への多大投資。

そして、広大な宇宙の資源を誰よりも早く得られるようにするため、調査用のマルチフォード・スーツの開発を。

結果を言ってしまうおう。

そんなことをする必要がなかった。

多くの国が必死に宇宙の利権を得ようとなっている中、とある大企業が新エネルギーの発見、そしてその製造方法を生み出したことを世界に発表したのだ。亀の歩のように、ゆっくりとしか進まなかった宇宙開発は横に投げられ、その技術を得ようと素早く行動を移

した。さらには新たに巨大な資源採掘所が見つかった。人は、もう宇宙進出には目を向けなかった。はつきり言ってしまうえば、当たり前前の事であって、だが醜く見えた。

しかし、そのエネルギーの発見を人々が喜んでいる最中、世界が揺れる事件があった。

人々はそれを『白騎士事件』、そう呼称している。

事件の全貌は以下の通りだ。

日本に攻撃可能な各国のミサイル、二三四一発がハッキングされ、発射されたのだ。中には条約違反のクラスター爆弾などもあったり、通常では考えられないスピードで飛ぶミサイル、あり得ない威力を持つミサイルなどもあった。前述でもあったように世界規模の戦争が起こりそうになった時に準備された、いわば忘れ形見の様なものだ。

それらが日本へ向かってきたのだ。日本を守っていたアメリカ軍のイージス艦もハッキングされ、ただ、そこにあるだけになってしまった。

つまり日本は丸裸になってしまった、というわけだ。

そんな混乱と絶望が渦巻く島国の上に、白銀の甲冑を纏った、一人の女性がいた。

女性は一振りの剣を構える。

そして そんな凶暴なミサイルをぶった斬ったのだ、約半数で

ある一二二一のミサイルを。

その素早さは音速を超え、たった一本の剣で約半数を斬るなど、正気の沙汰ではない。

だがそんな出鱈目でも、やはり二三四一発は多すぎた。しかも通常の速度より速いミサイルがあったのもよくはなかった。やはり、駄目だ。その姿を見ていた自衛官たちは、そう思っていただろう。

突如、空中に巨大な物体が現れる。当時実験段階であった大型荷電粒子砲だ。それを一度放てば、今度こそ全てのミサイルが無くなつた。

だが利権を求める欲の強い人間達は、つい先ほどまで新エネルギーだと喜んでいたのにも関わらず、それを求めた。

『目標の分析。可能ならば捕獲。無理ならば撃滅』

そうして日本周辺に集まった多くの当時の新型兵器達は 悉く落とされた。

そして何より、そんな中でも死人を一切出さなかったのは、その女性の余裕の現れであった。

莫大な損害を受けながらも、その強大な力を得ようと大隊すら準備し、出撃した時には、その女性は忽然とその場から消えていた。

たった一人でミサイル二三四一発、戦闘機二〇七機、巡洋艦七隻、空母四隻、監視衛星八基を一夜で撃墜、無力化したその『兵器』は、その能力に世界中を圧倒させ、魅了させた。

その『兵器』の名は、インフィニット・ストラトス。これを機に『天災』として知れ渡られる篠ノ之<sup>しんのすけ</sup>東<sup>たはね</sup>が一ヶ月前発表し、世界からは嘲笑された、ISとして世に知れ渡る機械である。

もとは宇宙活動用マルチフォード・スーツとして設計された欠陥品ながらも、この世界で最も強力な『兵器』となった、哀れな発明品、とも。

勿論各国はその強大な力が、直接自国に侵略されることに恐怖し、軍事的、私的行動に規制を掛けるためにIS運用制限条約を速やかに締結したのだ。

その発明者かというと、皮肉なことにそのISの用に忽然と姿を消した、ISの開発方法を世界に隠して。

その発明者は姿を消したときから指名手配中ながらも、未だ発見されていないし世間に顔を出したこともない。

しかし、このISは世界の金の動きを激しくさせた。

今までの軍事力を遙かに越える『兵器』だ。それを開発するのに越したことはない。

その金の動きは、多くの会社、組織を大きくさせた。

日本トップメーカーである倉持技術研究所、量産機ISシェア世界第三位のデュノア社、中東を中心に出来たアジアIS開発機構な



どなど。

そんな中、一つ奇妙な企業が混ざっていた。

それは今では人が目を向けていないものについての企業。

マストドライバー財閥。

アメリカを中心に活動している、NASAと同等、それ以上の宇宙進出の技術を持つ組織で、人類の増加・資源の枯渇が叫ばれる以前からあり、各国が宇宙進出を夢見たときには大量の金が流れ込んだ財閥だ。

既に時代はISとなった。だが元々ISは宇宙活動用マルチフォーム・スーツだ。それに類似した技術を流用すれば、他の企業より一歩も二歩も先に進むことが出来る。ただ、この財閥に与えられたISコアが少なかったのが、出遅れた原因であろう。

その数は一個。さらに多大な金を払ってコアをもつ二つアメリカ政府からレンタルして、計三個のみ。他の大企業の持つISコアの数と比べれば途轍もなく少ない。だが、それでも未だ大企業として存在していられるのは、その技術力の高さであろう。

実はこのマストドライバー財閥、ISが出た後、たった一年で大赤字を叩き出していた。

宇宙進出は、世間から見れば昔の話。今はIS開発。スポンサーが離れていったのにも関わらず、このISを使って宇宙進出技術の開発に力を注いだのが、失敗だった。レンタル料と宇宙進出技術の開発に金を湯水のように使い、すでに金庫の底が見え始めた。

だから、もう倒産するものだと思われたのだ。

だが、そんな時に彼が来た。

自身が持っていた約五十億ドルもの金を使い、一旦財閥を立て直す、マスドライバー技術とミサイルの技術を応用した、新たなISを作成。そのISでモンド・グロツソの部門優勝者、ワルキューレを毎年のように輩出させたマスドライバー財閥は、レンタルしていた二個のISコアを正式に所有することになり、過去の栄光を取り戻したのだ。

それだけでなく自国のアメリカ軍のみならず、世界各国軍からのIS兵器の作成を注文されたり、IS自体の作成を頼まれたりしているほどになったのだ。すでに、過去以上もの利益を生み出していた。

一度倒産しかけたマスドライバー財閥を立て直したこの男は、人々から尊敬と、忌避と、畏怖の視線を向けさせることとなった。

マスドライバー財閥の名誉会長の相談役、世界有数の投資家、そしてISとその兵器の設計士。

あの『天災』曰く、「着眼点が逝かれている男」。

スラッター＝ハニーサックル。

この男の、『定義の破壊』の物語である。



## 序章 その話、未来（後書き）

取りあえずは『ネギ兄』の更新はこれ以上遅らせませんのでご安心を。

代わりに、とは言ったらなんですが、この小説は更新がかなり遅くなります。さすがに長期連載停止は付きませんが。

タイトル通りこれは習作です。ストーリーのアドバイスは勿論、文章中で可笑しい点やこうしたらいいのでは、といった感想も宜しくお願いします。

それでもよければ今後も読んで頂けたらと思う所存であります。

どうか、宜しくお願いします。

P S . 勿論感想・評価は待っております。一言でもいただけたら、いただけないの差はモチベーションの差が愕然と違います。

第一話 その男、生誕（前書き）

一話目です、ようこそ。

## 第一話 その男、生誕

この世の多くの人は魔法とか神様という、非科学的な存在を否定している。

その存在を証明できないし、見たことも感じることも出来ない。ほとんどの人間は見たものや感じたものしか信じない、だから信じられないのだ。

それに、世界を見ているも神様という、善のみで構成されたものがあるとは思えない。

飢えに苦しみ死んでいく人がいる。懸命に努力していたのに天才にあつと言う間に越される人がいる。信仰深く生きていたのに殺される人がいる。数少なかった幸せが全て一気に崩れていく人がいる。悪事ばかりしていたのに生き延びて億万長者になる人がいる。

世界にある悉くは常に差別され、罪なき多くの命は息絶えていき、多くを殺した虐殺者は英雄と称えられる。

そんな理不尽な世界に神など存在してたまるか、そう考えているのかもしれない。

だが、無理矢理認めさせられたら？ 認めざる負えなくなってしまうったら？

彼は内心ため息を一つ吐き、ため息すら吐けなくなってしまうた体を見ながら、しばらくの間、そんなことに思考を巡らしていた。

なにせ彼の体は、赤子となっていたのだから。

彼は、彼の記憶上では科学者であった。専門分野は、宇宙進出の手段についてだ。

あまり自身の評価を気にしない人間だったが、その道では有名である。と自覚していた彼はある大手企業に勤めていて、一つの研究所兼自宅を作らせるほどの人物だった。いや、これでは語弊がある。彼は自己中心的思考の持ち主だというわけではない。寧ろ献身的に働いていたのにも関わらず、給料がペーペーのサラリーマンと変わらなくていい、といったほどの人物だ。別に彼が作れと言ったわけではない。一つの欠点故に企業から進んで作らざる負えなかった。

一つの研究所の一角が、彼の自宅と化してしまったのだ。あくまで、これは比喩だ。別にベットやタンスと言った家具が持ち込まれた訳でもないし、ゲームなどの私物を持ち込んだ訳でもない。それどころか、彼の机の上だけでなく周りには常に業務用パソコンと段ボールが二つ、そして紙媒体の情報が山のように積み上げられているのだ。そんな物品が置けるスペースは一切無い。唯一あるとすれば、身を縮めてやっと成人男性が入れるスペースが一つポカンと空いているだけ。

これが、原因だ。彼はこの研究所に入ってから一回も私用で出たことはなく、私用でなくとも片手で数えられる程度しか外へ出たこととはなく、ここで生活している。食事は毎日三食段ボールから取り出される某蛇さん御用達の固形食料と水。それと偶に塩を一舐め。睡眠は先ほど言ったそのスペースに、何も敷かず地に寝転がっていたが、それに見かねた女性研究員が一ヶ月後毛布や敷き布団

を持ってきたり、食事に誘ったりと色々と彼のことを思っただけで行動をしていたのだが、それら全てはやっぱりと彼に断られていた。

そんな生活をしていたため、目の下の隈は常に深く、髪と無精髭がぼうぼうと生えており、歩く度にフケが落ち、ほとんど骨と皮だけの黒く汚れた体つきであった。

たまたま視察に来たアグレッシブな社長がこの状況を見たとき、「家作るから、こんな生活止める！」という発言に対して「じゃあ、研究所兼自宅にして下さい」といったのは社員内では伝説となっている、二重の意味で。

こういう成り行きから建てられた研究所兼自宅のお陰もあってか、ある程度彼の生活基準が向上した。とはいっても精精風呂に入って体を洗うのと服を洗うようになったくらいしかないのだが。

新たに研究所を作ったためその研究所には彼一人となったわけだが、以前と変わらない生活を送ってしまうのでは、と考えた社長は何名かの部下を助手兼監視役として送った。それでやっとさきほどの生活基準になったのだから、以前まではどのような生活を送っていたのか、あまり考えたくはない。

数々の成果を挙げ、将来宇宙進出の土台となった有名な理論をいくつも打ち立てた彼は監視役が居ながらも、あまりにも酷使された肉体と多大な疲労のため、僅か四十二歳にしてこの世を去った。

死んでしまったか、と思った矢先にこの体だ。自分の興味のあること以外、特にオカルトなどと呼ばれていた類には全く興味関心が



無かった彼は、これはどういうことなのか、と興味深かったので考えてみたものの、あまりにも自身が持つ情報が無さすぎる。今後調べる機会があつたら調べよう、と少々興味が薄れながらもそう考えていた。たぶん一日もしないうちに彼はこのことについての一切の記憶がないだろう。

彼が精一杯今使える感覚を使用して、数が少ないながらも分かったことが、前世の記憶を持っていること、精神が前世のままだったこと、今が前世よりも未来であるということ、そして両親が日本人ではなく欧米系の人種であり、その中でも容姿が優れているということ。

(全く、早く未来の技術の数々を見たいというのに。それを研究したいというのに)

転生しても、やはり彼は変わらなかった。

「ハニー、見てくれ。この子が僕たちの子供だよ」

「ええ、そうねダーリン。この子が私たちの子供よ」

追加としては、非常にお熱い夫妻であること。

「全く、可愛いなあ。お、鼻はハニーにそっくりじゃないか」

「口元はダーリンみたいね。格好いいわ」

使われている言語は英語であったが、彼にとっては問題では無かった。資料を読むために彼は英語から中国語、ロシア語などといったものまでを把握しているのだ。主要国家ならば、なんの不自由も

なく暮らすことが出来るレベルだ。

この夫妻がそんな会話を延々と続けている中、彼は周りにもあるものだけでも、と注意深く観察をし始める。

（あまり現代と変わりはないな。……いや、あそこにある鍵穴、金属製ではないな。あれは……プラスチックか？）

更に注意深く観察を続けると、本来金属を使うべきものが金属でないものが多いことに彼は気付く。彼はまだ知らないが、資源、特に鉱石や石油などの資源の減少化による、そのような資源の使用の節約が世界規模で起こっているのだ。故にリサイクルをすることで半永久的に使い続けられる強化プラスチックや砂漠の環境改善化によって増え始めた木材が今日の生産物で主な原料となっている。

「そつだ、名前を決めよう！ ハニー、どういう名前がいいかい？」

「そつね、ダーリン。何がいいかしら？」

うーん、と二人は頭を抱えながら考え込んでいる。彼はさすがに今後使う自分の名前が気になるのか、そちらに耳を傾けている。彼は英語は分かるが、外国人の名のセンスや善し悪しなど分かったものではない。なのでどうしても日本人での基準になってしまうのだが、それすら危ういのはやはり彼だと思ってしまう。

「……スラッダー」

（ほつ……）

ポツリと、女性がそう口から漏らしたのを聞いた彼は、思わずそ

う心の中で呟いてしまった。他人はどう思うか、そういうのはよく分からないが、彼自身はその名を気に入った。

「スラッダーが良いわ、ダーリン」

「ハハハッ、さすがハニーだ。とてもいい名前だよ。そうだね、それがいい」

微笑みながら、夫妻は彼の顔をのぞき込む。その顔に浮かんでるのは、彼は久しぶりに見る表情だった。

(父さんも母さんも、こんな表情を浮かばせていたな)

そう前世で早くも亡くなった両親を思いながら、彼の新たな名は呼ばれた。

「スラッダー」ハニーサックル、それが君の名前だよ」

第一話 その男、生誕（後書き）

感想・評価をお待ちしております。

第二話 その男、引っ越し／その頃の彼の父（前書き）

どうも、金です。

今回は前回の二倍以上の分量です。

それと少々不謹慎な内容もあります。申し訳ございません。

では、どうぞ。

## 第二話 その男、引っ越し/その頃の彼の父

アメリカ合衆国・ニューヨークに、一つの家がある。

その家のリビングの端、デスクトップのパソコンが置かれている場所でそれと睨み合いをする、蜂蜜色の髪を持つ三歳程度の子供がいた。

スラッダー!! ハニーサックルだ。

スラッダーはキーボードをカタカタとしばらく打ち込んで、頭を掻きまぐる。すると先ほどまで打ち込んでいたものを消した。その表情は行き詰まっている研究者が悩んでいるようにも、また新しい玩具を貰った子供が笑っているようにも見えた。……彼はまだ子供なのだが。

画面には何枚もの設計図が映し出されており、そこには様々な部品が描かれているものと、銃のようなものが描かれているものが写されている。

アメリカ海軍が現在研究中の、海上高速戦闘用レールガンだ。

一二、五メートルに及ぶその無骨な砲身に、電気供給用のケーブル、砲身の冷却システム、その他に二次案としてのバッテリー式のタイプのものなどの多くの種類がウィンドウで出されている。

しかし、これは失敗作だ。

一つを除いた残りのものは試作品で失敗作。そしてその一つがスラッダーが今設計中のそれだ。

しかし失敗作だとしても国家機密級のものには変わりはない。ではなぜ彼がその設計図を持っているか。ハッキング、それしか無い

だろう。

ハッキングをしたのは良いものの、この設計図を見てスラッガーは唖然としてしまった。その設計が、あまりにもお粗末すぎたからだ。彼が知らないような技術や部品も勿論たくさんあるが、前世では世紀の発明家と詠われるほどの人物だ。彼の発明の中にはレーザンガンを応用して作られたものもあってか、時代遅れだがその設計図を覚えているため予測付けることは出来る。どうしても分からないものは調べるなり、ハッキングするなりして情報を得ているのだが、それらのことを全てした結果がこの感想なのだ。

（全く、多くの技術はあるのになぜこんなものしかできないんだ？  
もっと、ここの部品はこっちに持っていったりした方がいいだろう。

しかし、実験が出来ないのは辛いなあ。もし出来たらもっと楽に設計できるんだけどなあ）

彼の頭脳が異常なのか、設計者たちが馬鹿なのか、それともその両方か。あまり、考えたくないことだ。

「スラッガー、お手伝いしてー」  
「分かった」

スラッガーの母、マリー「ハニーサックルの言に対して応答した彼は、パソコンをスリープモードにして、台所へ向かった。

「そつえば言っていなかったけど、来月日本に引っ越すわよ」  
「えっ」

昼食を口にしている中、ほんわかとしながら重大な事実をさらっと言いのけたマリリーに、スラッダーは上手く対応しきれなかった。そういえば最近二階から物音が聞こえるなあ、などと思っていたら引越しの片付けだったのか、と納得する。

しかし、この女性は突然重要なことを言うから隙を見せたらいけない、彼はそう先日心に決めたはずなのにあっさり隙を衝かれてしまったとちょっとショックを受けているのは余談だ。そんなことよりも彼はその引越し先に注意した。

日本。

生前、と言うべきか前世、生活していた国だ。思い入れは、少しある。だが彼はあまり乗り気ではない。いくら思い入れがあっても、時期が時期だ。

四、五年前からアジア諸国間での緊張が高まって来ている。

原因は各国間での領土問題と不法入国、それによる国境での小競り合いだ。

これより少々前、危うく戦争にまで成りかけた頃からそのようなことはあったのだが、ロシアは北方領土に、韓国は竹島に軍の基地を設置したり、国籍不明の漁船が不法に領海に入ったりと、そんなことが最近多発しているのだ。

しかし、そんなことで済んでいる日本はまだいい。ロシア、中国と韓国、北朝鮮の両国間では既に小競り合いという程度だが、戦闘があった。西アジアでの軍事行動も増えていたり、多くのテロ組織の声明が多く起こっていたりする。その雰囲気は、まだアジアよりはいいもののヨーロッパ諸国やアメリカ国内でも、うっすらと感じ始めている。その最もな例が、北極などの、どの色にも染まってい



ない地帯を巡つての、いわば一般人は知らない武力衝突だろう。

それら原因が、少なくなってきた資源の確保の為である。

スラッダーの父、ジョージ・ハニーサックルがレートビジネス、つまりは様々な物品の変動する原価の差違で利益を産む事業の会社の社員として、しかも統合的な纏め役として勤めているお陰か、そういう話をスラッダーは偶に耳にすることが出来る。マスメディアの流す情報より正確に、より詳しく知ることが出来るのだ。これは余談だが彼はこの話を赤子の頃から聞いており、段々と興味を持ち始め、現在は偽名を使って株でそれなりの資金を手に入れている。つまりは、一般人よりも資源の価値の変動については詳しいということだ。その値段の変動が、将来的には更に大きくなることも。現在の車などといった乗り物のほとんどがガソリンを使用せずに運転できる電気モーターを積んでいる。だが、その元となる発電関係はそうともいえない。

さらには、テロによる原子力発電所暴走、破壊による原子力発電所の衰退。テロ組織の活発化は今に始まったことではない。以前からそれは活発になっていた。それ故に各国は原子力発電の警備増強ではなく、それらの停止を決定した。やはり、世間の風潮には政治は勝てないものだった。

現在では太陽光発電などの、いわば資源を必要としない発電が主流となつているのだが、どうしても国土の狭い国は狭い環境で多くの電力を産む火力発電に頼らなくてはならず、やはり資源を刻々としかも大量に消費しているのだ。

だがそれを逆手に取り、利益とそんな国々に対して絶対的なアドバンテージを得ようと行動する組織もいる。

その例が、中国やロシアといった国家である。

自国が持つそれらの資源を高値で売り、それだけでなく海底奥深くに眠っている天然ガスを求め、虎視眈々と日本海を狙っている。だからわざわざ「我らの国土防衛のために」と言う見え透いた虚実の建前を持ち出して、日本国近くに軍事基地を建てたり戦艦を領海ぎりぎりの所まで出撃させたりして、軍事的威圧をかけるのと同時に外堀を掘っている。只の弱いもの苛め、というのが欧米側での認識だ。

こんなことから、彼はあまり日本へは引越などしたくないと思っている。正直に言ってしまうえば、ただ引越しの片づけの際にパソコンが梱包されて使えなくなるのが嫌なだけなのだが。

そこで疑問が浮かび上がる。先ほどあった様にジョージ・ハニーサックルは様々なレートの担当部署の纏め役である。こういった転職などとは無縁の役柄のはずなのだが、なぜこうなったのかをスレツガーは少々疑問に感じた。

「父さんは転職とは無縁のはずだろうか？」

「最近あの昇任したのよ。スラッターには言っただけでなかったかしら？ 確か新しい事業が作られたから、あらゆるものの専門的知識を持ちリーダーシップのあるオールマイティな人がまず纏めて、後任の人に役を渡す方針を取ることが決定したんだって。それでそこに大抜擢されたのが、あの人のよ。ああ、ダーリン格好いいわ……！」

彼はいやいやん、と頬に手を当て顔を振る自分の母を横目にその新事業について、少々考える。

新事業、しかもレートに関するものは日本には少ない。一体何なのだろうかと幾つか推測を立てて、彼は自信の母へ聞いた。

「その新事業って？」

「宇宙開発、マスドライバーとマルチフォーム・スーツ中心の事業  
って言ってたわ」

一つ、胸の鼓動が大きくなったのをスラッダーは感じた。

マスドライバーこそ、彼が研究していたテーマであり、最も力を  
込めていた分野だ。

マスドライバーとは衛星軌道上に大量の物資を入れたコンテナな  
どを宇宙に「放り投げる」装置である。例としては「砲<sup>コンテナ</sup> 弾を打ち  
上げる大砲」といったところだろうか。

これはロケットによる打ち上げで掛かる、キログラム当たり数千  
ドルという莫大な費用を安価にしようと考えられた結果、発案され  
た装置だ。その打ち上げの方法は幾つも考えられており、その中に  
は先ほど彼が設計していたレールガンと同じ原理のものもある。

そして、マルチフォーム・スーツも彼が研究をしていた分野だ。  
マスドライバーほどではないが、彼が熱中していたものの一つだ。  
興奮するのも無理はない。

段々と、抑えていた心臓がドクンドクン、と高鳴っていくのを彼  
は感じた。興奮しているのが、はっきりと分かる。

「そう、なんだ」

少々答えるのに間を空けてしまったが、マリーはなんも疑わずに  
昼食を続けている。

（ああ、研究したい調べたい作りたい実験したい観測したい完成さ

せたい！！！！）

親を悲しませないためにも少々前世の様な行動を抑えていたため、スラッダーは我慢しきれずにそう悶え始める。

流石に、そんな状況を不審に思ったマリーは、心配そうな表情になつた。

「大丈夫？ 凄く苦しそうよ。 あら、顔も赤いわ。 息もなんかいつもと違うし……病院に行く？」

すぐさま研究をしたい彼が全力で否定したのは、言うまでもない。この会話の丁度一ヶ月後、彼らは日本へと旅立っていった。

所代わり、先に一人で日本に来ていたジョージ・ハニーサックルは部下であるクックマンが運転する車の中、財布から取り出した家族写真をウツトリとしながら見ていた。

「主任、また写真見ているんですか？」

「ふふふ、私の自慢の嫁と息子だ。可愛いだろ、両方！」

はいはいそうですね、と五年前に彼がこの男の下に来て以来、何千回と言ってきた投げやりな返事をする。

と、いつもはここから家族自慢が長々と始まるはずなのだが、口を噤んでおり、どうやら様子がおかしい。バックミラーでジョージを見ると、真面目な顔で写真を見ている。先ほどとは全く違う、別人の顔付きをしている。心なしか、怒りが潜在しているようにも見える。

「どうしたんですか、主任？ いきなりそんな顔をして」

一見、軽く問いているようにも聞こえるが、クックマンは内心緊張していた。

その表情と雰囲気は、仕事の、それも重大な時に浮かべるものである。クックマンは、彼のことはこの五年間で大凡のことを知っている。それは自負であり、事実である。そのことをまた知っている。ジョージはわざわざ彼を以前の部署から引き抜いて、共に日本へと来た。いわば秘書と言っても差し支えないような存在だ。

彼は家族写真を財布に戻した。

「いや、なに。最近あそこの社では余り良い噂を聞かないからな…  
…それに、な」

視線を写真から胸ポケットへ動かす。共に、その中に入っている、また別の写真を思い出す。

そこに投射されているのは、一人の老人。身長の高さは欧米人のそれである。げっそりと、肉が削ぎ落ちている頬骨が浮き彫りに現れている頬を持ち、その瞳の光は爛々と欲望が輝き、それはまさに獲物を狩らんとする鷹に肖似していた。

男の名前は、ロイベルツ＝オールドニック。彼らの企業のイタリア・ベネツェア支社の支部長をしていた、裏切り者である。

「あの男が出入りしていたと、ナッツレイとミヨソリから聞いた。本来ならあの男を殺してから買収する予定だったんだけど、あの欲深な老狗め。裏切りながらも多くの殺し手から生き残る老獪さだけはあつた」

一企業の社員が言うには物騒なことを口にしながら、淡々と、しかし忌々しげに、そして憎々しげに聞こえるその言い方からオールドニックへの暴憎の強さが分かる。クックマンは事前に本社で読んでおいた資料を思い出す。

「確か、ベネツェア本社の研究員、しかも研究の第一人者五名を殺害後、新型パワードスーツを奪取してすぐさま日本へ入国。その時本社からの追っ手も数名殺していますね。しかし日本政府には見逃し金を幾らか払ってますよね？ ではなぜすぐにあの、本社の犬と称される『ヴァルキュリエ』は動かないんですか？」

「動こうにも、動けないんだよ」

そう言いきった彼は、額から黄金色の髪へと撫でた。真面目な、しかし何も感じさせない表情は、苛立ちを表している。逆に、してやったりといった表情もあった。

「あの盗人紛いのイエローモンキー共め。『ヴァルキュリエ』が日本国内で闘争する場合は、自衛隊からの監視者を参画させろって言うてきやがったのさ」

「ああ、成る程。確かにそれは忌々しいですね」

「まあ、あいつらは僕らには『ヴァルキュリエ』しか戦闘機関はない、なんて思っているようだ。まさか幹部の一部は戦闘のプロである、というのは考え着かないだろうな」

つまりは、日本政府は闘争の中で技術を掠り取るうという心計な訳だ。彼らが今まで言っていたように、そのパワードスーツは最新技術の漏洩を防ぐためにもそれは防ぎたかった。しかし、暗殺が失敗となれば最後に残るのは戦闘のみ。故に彼らがこの極東の島国へ派遣されたのだ。

しかしまだ、クックマンの疑問は解かれていない。

「ただ、それだけだったらまだここまで急を要さなかったんだ」

まるで、血反吐を吐くように、ジョージは苦々しく紡ぐ。クックマンは後方から歯ぎしりの音が聞こえるような気がした。

そう、その程度ならこの人はこれ程までには怒らない。

この程度のことは、自分の上司からしてみればまだ奇立ち程度で、舌打ち一つで済むこと。

研究員を五人殺され、新型のパワードスーツを奪取されたことなど、今までの一連の話などこの男からしてみればこの程度のことなのだ。

では、これほどまでに怒る要因は、何か。

「ベネツエア支部の地下には、世界を揺るがす研究がされているという噂、聞いたことはあるかい？ 結構有名な噂なんだけどね」  
「ええ、噂程度には……」

十年ほど前から、彼らの会社内で流れる、とても有名な噂。ベネツエア支社には、世界の価値観を狂わす研究がされている、というものだ。馬鹿な、と鼻で笑う者がいれば、それをまた真に受ける人間もいる。そんな人間が五年ほど前から今に至るまで語りてきたそれは余りにも荒唐無稽な話。しかしそれが実しやか語られていたのは、彼から見ればある種の洗脳を思わせる光景だった。

曰く、人間の死骸から新たな人間の創造の方法を模索している。

曰く、バイオハザード級のウイルスを作成している。

曰く、世界から逸脱した神の存在を確認している。

それは余りにも馬鹿げた、信じることすらしないような噂ばかり。しかしそれは、正に感染力の強いウイルスの様に広まっている。形はどうであれ、だ。

その真実を知りたくて、そこへの転勤を願うものがいるまで出てくる始末だ。

その度に、それを知る上司は決まり決まってこついう。「やめておけ、お前が考えているようなものは無いぞ」と。そしてそれ以外を語らないのも、またよく耳にする話だ。

この手の話は余り好まない彼が、これを語るとはどういうことだ、そう考えさせられる。

「お前のことだからこの手の噂話は信じないが、何かがある、というところぐらいは気付いているんだろう？」

「あれほど不自然な噂話もないでしょう。一気に同じような噂話が出ても三つも四つも、始めからあったように流されていたんですから」

彼は続ける。

「大抵の噂話は誇張されたり、何か変質して流れたりはしますが、始めからこんなに大量に流れるのは不自然だと思っていましたよ。それに、あんなB級映画みたいな陳腐な噂、誰も信じないようなものなのに皆噂をするだなんて、絶対これは仕組みられた噂話だ、と」

クックマンは苦笑いを浮かべ、目的地へとハンドルを切る。

「でも、あの噂話はフェイク。真実を覆い隠すの布、でしょう」



バックミラー越しに見える彼は、頷く。

「そうだ、そんな無実滑稽なものじゃない。そこで研究されているのは、電子数学の財宝、そう呼ばれている」

「電子数学の、財宝、ですか」

それを聞き、クックマンは懐疑の声を上げる。

「ここからは幹部級の人物のみが知りうる情報だ。本来その秘書にすら教えてはならないんだが……仕方がない。今回のもう一つ仕事に関わる」

二人はトランクの中身を意識する。それは一級品にして、彼らの相棒。彼らの言う、もう一つの仕事の、だが。

「電子世界の財宝。……十数年前、つまりは世界全土で、正式に資源枯渇化を宣言した時だ。傘下企業は兎も角、主体ははレートビジネスだからね。荒れに荒れたんだけど、その時に会議である老狗が提案した技術が、それさ」

「しかし、その開発は秘密裏に行われていますが？」

「ああ、内容が内容だったからね。……炭素とタングステンの原始を人工的に組み合わせ、プラチナの元素を作るんだと。工業用プラチナは高くて、量も少ない。だからという計画だったようだけど」

フツ、とジョージは鼻で嘲笑する。

「現在は切削工具の方が有益だね。それに使うタングステンを減らしてどうするって、十年以上も経っているのに結果を出していない研究を中止にして、その分のタングステンを売ろって話が正式に

決まった。そうしたらあの老狗、大慌てで抗議したんだけど役員たちは聞く耳を持っていない。もう後が残されていない彼は、」

「……工業用プラチナを多用することで有名な五十嵐重工に、その技術を持ち込もうとしている、ですか」

「そういうことだ。今はまだ、取引中とのことだから、まだ技術を流してはいない。……さすがにこの技術は美味しい。だから上はこの技術を未完成のままキープしつつ、然るべき時に実験の再開、公表をすることに決定した。それに、五十嵐重工には弱ったままでいて欲しいしね。」

僕たちの仕事は二つ。表は五十嵐重工から織斑宇宙工学研究所の買収、裏は裏切ったロイベルツ・オールドニツクの暗殺。今回はポ・ナスが掛かっているから、全力を振り絞りなよ。ふふん、このポ・ナスで息子に最新のパソコンを買ってやるんだ」

あんたの息子はまだ三歳だろ、というクックマンのツッコミは一生この親バカ上司には届くことはあるまい。

さて、まだスラッガーがアメリカで引越し作業の日々に明け暮れている頃、彼の父ジョージ・ハニーサックルとその部下、クックマンは日本で仕事をしていた。現在は近くにあった廃工場で己の装備を確認していた。

「しかし主任、暗殺っていつても、今回はどうやって殺るんですか？ さすがにこんな平和ボケした国なんですから公衆の面前で、つてのはちよつと気が引けます。それにそんな国なんだから上からもどやされますよ、きつと」

「うん？ いや、公衆の面前でしとめるよ？ 一番気が抜けているのがその時なんだ。それに、『ヴァルキュリエ』は社長の意向もある

つてそういつところに気を向けすぎている。あの老狗、イタリアから脱出する時『ヴァルキュリエ』から逃げられることはある。常に周りには民衆、いなくても狙撃が難しい場所、逃走にもつてこいの場所にいる。だから暗殺をしようにも出来ないんだよ。別に暗殺の場合は監視者をつけなくてもいいのに、ね。だけどあの老人は一つ勘違いをしている。皆が皆、社長の狗だなんて、そんな浅はかな考えだから簡単に首が切られるんだ」

「はあ、やっぱりかあ、とクックマンはどこか抜けた返事をしながらもその瞳の奥には、どのようにして殺そうかと数多の必殺である殺害方法を思い浮かべる。無意識にか、銃を持つ彼の手が強く握りしめられていく。」

「ナッツレイとミヨンは事前に入国して情報集め、チャールズは失敗した場合に後から荷物を持ってきますが、どうします。もう集合場所まで行きますか？」

「いや、いい。あいつは僕の顔を知っているからね。下手に出歩くとバレてしまって、警戒させてしまいかもしれない。ギリギリの間まで、そしてそれなりに変装を施してからいくよ」

拳銃のグリップを数度握り、それを胸元に隠した。不自然に盛り上がるそれは煙草の箱の類に見えそうでもない。だが、この硝煙独自の臭いは消し切れていないことに気付いた彼は、近くにあった消臭材へ手を伸ばす。

「ナッツレイ達から情報を引き継いだ後、各員は各要所へ。後は五十嵐重工の前に現れたロイベルツを殺害、パワードスーツを回収の二つで終わりだ。何、失敗なんかしないさ」

ヒラヒラと掌を振るい自信満々でいう彼の瞳は、その言とは異な

り隙という隙は無い。

「さて、ロイベルツ・オールドニック。企業を裏切ったその業、逃れるにはあまりにも大きすぎたということを思い知らせてやるよ」「

## 第二話 その男、引っ越し／その頃の彼の父（後書き）

でででーん、全く原作のげの字も出ていないことに驚く金。

ま、所々色々あるんですがね。こんな話がちよろつと続きますよ  
！。

感想・評価をお待ちしております。アドバイスもお願いします。

第三話 その男の父、昔の友人と出会う（前書き）

どうも、金です。

うーん、原作までの道のりが長い、というか主人公の出番が少ない……。

そんな悩みを思いつつ、どうぞ。

### 第三話 その男の父、昔の友人と出会う

「ナッツレイさん、お久しぶり。それにミヨンリさんも」

目の前には一組の男女がいる。男は黒肌の男だ。名はナッツレイ。ジョージ・ハニーサックルの部下の一人である。

その腕に絡み付いている東洋人の女性が、ミヨンリ。ナッツレイと同じく彼の部下だ。

この二人はよく組み合う仕事上のパートナーであり、またプライベートでは恋人同士である。このことにジョージはあまり賛同できていない。やはり、公私を混合すると判断が鈍ってしまう。それで命を落としていった同僚を多く知っている。もしくは、裏切っていた同僚も。

もし片方が裏切り者であり誘われてしまった場合、情に流されてそれを受けてしまうかもしれない。誘われなかったにしても相手を撃ち殺すことが出来るのだろうか。

もし片方が人質にされ何か企業が不利益になる要求をされた場合、その要求を飲んでしまうかもしれない。飲まずにしても人質を気にせず敵を殺すことが出来るだろうか。

やはり、無理だろうと判断する。それが人間という生き物だ。そこまで冷徹に判断を下せる人物は、自分も含めて目に掛かったことはない。いや、一人いるが、やはりそういった人はかなり限られている。ジョージはそう考えつく。

だが、そう心配しながらも、このカップルが楽しんでいる様を見ると、その感情も少しは払拭される。

「ええ、お久しぶりです。ジョルジオさんにクックマンさん」

ナッツレイが小さな苦笑いを浮かべて挨拶を返す。ミヨソリもまた、会釈をした。

このジョルジオというのは、ジョージが変装時に使う偽名である。彼が変装する機会は十数回以上あるのでいくつか持っているが、このジョルジオは彼が一番使っている偽名だ。彼は気に入っているようだ、彼の部下達はそうは思っていないらしい。

「しかし、いつもすみません。毎回頂いてしまって」

「いえいえ、いいんですよ。こう食べて下さる人がいると育てた甲斐がありますから」

そういつてナッツレイが渡したのは、野菜が入っている袋だ。思いつき値段シールが貼られているのは、愛嬌とあの二人は言っていたのを思い出し、ジョージは笑ってしまった。

彼がそれを受け取ると、少々挨拶を交わして両方とも離れていく。ナッツレイ達は人混みの中へ、ジョージ達は車の中へ入る。

すぐに袋に入っているUSBメモリーを取り出すと、ノートパソコンに繋いだ。

画面にはロイベルツと交渉している人物やその進行状況、射撃ポイント、もし逃げた場合の逃走経路の予測、さらには隠れ家などが書かれている。

それを見て、クックマンが顔をしかめた。そこに書かれた情報は、あまり芳しいものではない。

「不味いですね、予想よりも交渉の進行が早い。もうあと少しといったところですか」



「ん、まあ僕からしてみればこの程度の速度だと思っていたよ。あいつは昔から交渉の展開速度は速い方だったしね。『ヴァルキユリ工』は少々楽観的に見たら、の話ぐらいで聞いてたから」

クックマンとは違い、その表情には少々余裕があった。それどころか、笑みを含んでいる。

「でも、やつぱり会社には泊まっていないか。この老いばれは変なところでプライドが高いことと、白人主義者としても有名だったから極東の会社には泊まりたくないんだろうね。それに交渉でつかえているのは要職の種類と報酬の値段かな？ 出来るだけ搾ろうとしているのが目に見えて分かる。全く、それが命取りになるとは分かっているのかな、あの老狗は？」

くつくつと笑いながら、射撃ポイントを見る。

五十嵐重工本社の玄関から扇状に展開されている赤いポイントは無数とは言わないものの、かなりの数がある。ビルの上、その中が多いが、路上からの射撃も考えられてポイントされているのは、彼ららしい。

しかし、ここで一つ疑問が浮かぶ。それは、隠れ家が分かっているのに何故その隠れ家に強襲を仕掛けないのだろうか。

理由は簡単なものである。パワードスーツがあるからだ。

本社からの情報によると、その性能は従来のものから一線を引くほどのもので、勿論ロイベルツが逃走したときには武装していたことも確認されている。そんなものがあるところに、生身でみすみす強襲を仕掛けるなど、馬鹿馬鹿しいことである。

だが、隠れ家を必死に隠そうとするロイベルツがパワードスーツを身に纏っていないタイミングである交渉への移動時こそ、唯一殺害できるチャンスなのだ。逃せるわけがない。もし逃してしまったり、それこそ仕事が失敗に終わってしまう。

だから彼らは射殺にここまで拘っている。ただ一つの、殺害方法に。

「結構あるね、さすが日本。射撃を考与した建物にはなっていない。そんなことが考えられない、というかあり得ないなんて考えているのかな？ そうというのはフィクションの世界にしかない、って」

機嫌が良さそうに語るジョージは予測される逃走経路と照らし合わせて、最も良いと考えられるポイントを探す。クックマンはその言に共感を覚えたのだろうか、笑みを浮かべる。

「全くですね、主任。安全すぎるのも考え物だ」

この五十嵐重工も子飼いの傭兵集団戦闘組織が存在するが、行動するのは専ら海外で、国内で行動するにしても人目の少ない田舎ぐらいだ。よって、今回はこの集団からの横槍はないものと考えられる。彼らのような人物たちからすれば甘い集団だと評価されるが、これからのことを考えれば幸運である。

「さてと、次回の交渉が今から二日後。僕らはロイベルツが交渉に来たところを、五十嵐重工本社前で射殺する。ナッツレイとミヨンリにはパワードスーツの回収をして貰おう。クックマン、車を出せ」「了解です、主任」

ゆっくりと、青色の車が動き出した。

さて、彼らが逗留を予定しているビジネスホテルに着くと、その

玄関前には東洋人、正確には中国人がいた。

「よお、ジョージ。久しぶりだな」

「……今はジョルジオだよ、李」

見事な顎髭に、豪快な面構え、筋肉隆々たるその巨軀からは、以前この男から食べさせて貰った料理の匂いがした。勿論、それ以外の匂いもするが。この大男は頭を掻きながら話す。

「俺は俺で、今は 鳳<sup>ファン</sup> だ、ジョルジオ。んで、今回はどんな厄介事を持ち込んできたんだ？」

「今の君には関係ないだろうけど……まあここで話すのもなんだし、君の店で食事を取らせて貰ってもいいかな？」

「ああ、構わねえよ。まず飯屋が人を選んでどうする。商売上がりたりだろうが。んで、何時来る？ 今すぐでもいいが」

「じゃあ、そうさせて貰おうかな。勿論、美味しいだろうね？」

「当たり前だろう、この俺が作るんだ。美味くないはずがない」

ジョージの挑発的な言に眉一つ動かさずに返答した男は、ふんと鼻を鳴らして口端を吊らせる。自分達と同じ匂いが僅かにする鳳という男のことを、クックマンは知らない。疑問を浮かべている彼に気づいたのか、ジョージは双方に紹介を始めた。

「鳳、こいつが今のパートナーのクックマンだ。若いくせに中々良くやる奴だよ」

「ほお、この自己中にもパートナーができるとはな。しかもこいつに中々良くやると言わせるとは、大した奴だ」

素直に驚嘆している大男は、手を差し出してきた。ゴツゴツとした岩のような拳は、調味料の匂いの中から微かに硝煙の匂いが嗅げ

る。

「初めましてだな、クックマン。鳳 エンライ だ。一昔前、お前さんの前に、こいつのパートナーをしていた。今はしがない料理屋をやっている。日本に来たときは、是非来てくれ。割り引きするぞ？ 勿論、味は保証する。美味いぞ」

朗らかな笑みを浮かべたこの男の双眸は、クックマン以上に鋭く、燃え上がっているものだった。

「がっはっは、まーだお前は箸が使えないのか！？ お前の部下は出来ているぞ！」

「うるさいぞ、鳳！ まずこの箸っていう道具が使いにくいのが悪いんだ！ ええい、もういいからスプーンとフォークを出せ！」

キッチンからの罵倒に、大声で反論する上司を見たクックマンは一瞬呆然とするが、不思議と笑いがこみ上げてくる。既に鳳の妻は口に手を当てて、笑っている。

「あ、クックマン！ お前は笑うな！ 減俸するぞ！」

「ええ、それは酷くないですか！？ 横暴だ！ 職権乱用だ！」

「うるさい、うるさい！」

「おいおい、そんな調子で大丈夫なのか？ 部下達が呆れるぞっ！」

「ああ、奥さん聞いて下さい。こいつ昔、……」

「おいおい！ そりゃ無いだろ！？」

「あらあら、そんなことが……あんだ、今晚そのことについてちゃんと聞かせて貰うよ？」

「うげえ！？」

先ほどのまでの雰囲気はどこへ行ったのやら、鳳の小さな中華料理店の扉に貸し切りの看板を掲げ、彼らは半ば宴会のような、どんちゃん騒ぎを起こしていた。

彼の妻もそこにおり、全く、彼らが先ほどまで一人の老人を暗殺しようとする騒ぎなことを考えていたなど、もしこれを見た客は誰もか思いもしないだろう。そんな、暖かな雰囲気醸し出していた。

「ランマオ 藍猫、ちいと男同士の話つてのをしたいんだが……いいか？」

鳳は自身の妻、藍猫にそう呼びかける。すると彼女は腰に手を当てて、鼻で深く息を吐いた。

「しょうがないね。でも、あの話は絶対することは、忘れないですよ。うげ、マジかよ。……はいはい、分かりましたよーっと」

絶対だからね、そう言い残すと彼女は店の奥へ入っていった。この店の奥が、彼らの家なのだろう。

「おい、ジョルジオ。藍猫は明るいのが良いが、結構根に持つ性根なんだから、ああいうことを言うな」

「すまないね、なにせ初めてであったものだから」

そういつて笑い合つと、鳳はズイツ、とキッチンから身を乗り出す。

「んで、何のよう日本で来たんだ？ 確かに織斑宇宙工学研究所の買収をするっていう話は聞いていた。彼処の宇宙進出技術とマルチフォーム・スーツは既に国家単位での研究領域にまで達しているっていう情報があるくらいだからな。だがな、その上の五十嵐重工

は穴だらけだ。親族会社なもんだから社員は不満だらけ、それに今代の社長がボンボンのアンポンタンに育ちまったもんだから段々と赤字を出している。部下が優秀でもケア出来ないくらいにな。…だからだ。なんでお前位の幹部を出したのか。そこが気になる」

「現在戦闘できる幹部は、俺を含めて十三人。その内十人が今手を離せなくて、一人は妊娠中、もう一人はまだ若手だから、もう少し育てる必要がある。そうになると、開いているのが僕だけでね、しょうがなく、僕が出張る羽目になったのさ」

「……誰が、何をやらかした？ ロシア・スルグト支社か？ ウエストの小僧はタカ派だからな、若さに任せて動いた、っていうのは考えられる。……ドイツか？ イランか？」

「……イタリアだよ。ベネツェア支社のロイベルツの、老いぼれがターゲットだ」

「……電子数学の、財宝か。……まさか完成していたのか!？」

「いや、全くという程完成してないよ。ただ、あの技術はキープしていたくてね。取りあえずは流出を抑えたいから、あの老狗を殺すことに決定したのさ」

一通り話し終えて、両者はコップに入っている水を飲んだ。クツクマンはというと、二人の話を聞きながら料理に舌鼓を打っていた。鳳は顎を撫でて、ふむ、と納得する。

「なるほどなあ。彼処は確かにプラチナを多用する所だったな。しかし、随分元気な爺さんだことだ。わざわざ日本に来るなんてなあ……やっぱりあの爺さんは、中々業突張りだったな」

「ああ、企業を裏切ってまで金やら名誉やらを求める奴も、いないもんなんだけどね。あの爺さんからしてみれば、危険な橋を渡つてもそつというのが欲しかったらしい。まあ、今までの借りを一気に返させて貰うことにするよ」

鳳はそういうジョージに向かって意地の悪い笑い顔を向ける。

「お前はあの爺さんから色々されてたもんなあ。……きっと自分よりも若いくせに、自分より偉かったのが気に食わなかったんだろ。嫉妬してたんだろ、やっぱ」

「ふん、そんなのは関係ない。社長も完全実力主義を掲げていたんだし、あの老狗より僕の方が実力が上、っていうことじゃないか」

「そういうのに嫉妬するのが、人間っていうもんなだがあ。クツクマンとやら、飯ばっか食ってないで、お前はどっ思う？」

「へ、俺、ですか？ うーん、やっぱ嫉妬しちゃうと思いますかねえ。だって若いのがしゃしゃり出てたら、俺でも嫉妬というか、怒りというか、そんな感情は出ると思いますよ、やっぱ。そういう風に客観的に見える人って中々いないもんなんじゃないんでしょか」

カラン、と溶けた氷が落ちる音を響かせながらクツクマンは水を飲んだ。

「そんなものなのかな、人間ってというのは。是非とも息子には客観的に物事が見れる人間になって欲しいね」

「……前に息子さんと会った後に言いましたが、やっぱりちよつと異常ですよ？ あんなに大人びた三歳児、聞いたことがありませんが」

「ん、どんな感じなんだ、こいつの息子は？」

「異常って、失礼な。僕の自慢の息子になんてことを言うんだ」

「いいから、どんなんだ？」

「ええと、この前はですね……」

「クシユンツ」

引越しの片づけの途中、スラッダーは可愛いクシヤミをした。特に鼻がムズムズとしていたわけでもなく、風邪を引いていたわけでもないが、唐突にしくなつたのだ。

「……ふむ、何でだろうか」

前世では、クシヤミをしたときに自身の噂がされている、ということを知ることがあるが、もしかしたらそれなのだろうか。

「……私らしくないな」

こんなことを感じる人間ではなかった。そう自身を評価していたスラッダーには、このことは驚きだった。自分の何かが確実に変化していつている、と。

「あら、やっぱり風邪を引いたんじゃないの？」

このクシヤミを聞きつけたのか、マリーがそうスラッダーに聞いた。以前のことを覚えていたらしい。

「埃が舞っていたから、たぶんそれじゃないかな？ だから病院には行かなくてもいいと思うよ」

適当に理由付けて、なんとしてでも研究の時間を削られたくないスラッダーであった。



「そういえば、鳳さん。なんで仕事を辞めたんですか？」

クックマンは唐突に目の前の大男に聞いた。彼らの過去の話を聞いていると、相当の実力の持ち主だったことを伺えた彼は、何故辞めたのかと疑問に感じていたのだ。

鳳は腕を組みながら、その質問に答えた。

「うーん、やっぱり結婚したからだろうなあ。もし仕事途中で死にまったら、家族が路頭に迷っちゃうからな。それに、飯を作るのも好きだったからな。丁度良い機会だったから辞めたんだ」

「え、でも主任も結婚していますけど辞めていないし、そういう場合は戦闘系の仕事からは外して貰えるじゃないですか。そういうのになんでしなかつたんですか？」

自分が何故ここまで食い下がるのか、クックマン自身も分からなかった。だが、この疑問は絶対に解かなくてはならない、そういう信念があつたのを感じていた。

「俺を選んだのは、一つの道に過ぎねえんだ。こいつの選んだ道は、企業のために体を張って危険ながら高利得を得る道で、俺を選んだ道は、企業を捨てて低利得ながら安全に過ごせる道を選んだだけだ。それに、戦闘系から外して貰っても、企業が絶対安全とは限らねえだろ。結構彼処はいろんな所から恨まれててな、他の所から攻撃される可能性がある。だから辞めたんだよ。絶対安全って訳じゃねえが、企業よりは幾分マシだろ」

成る程、クックマンはそう思った。そういう道もあるだろう。彼らの道は、対照的だった。だから、比較できる。

今までの仕事では、何度も死線を潜り抜けてきたのは事実だ。何

度も死んだ、絶対逃げられない、と感じてきたのだ。安全性から見れば皆無な仕事だ。

それに企業本社が襲われたことはないが、何度か襲われたという話は聞いたことがある。今回の場合もそうだ。科学者が殺された、としか聞いていないが、その間には一般の社員も警備員も何人も殺されているのだろう。

この男が選んだ選択に、間違いはない。だが、何故だろうか。クックマンは喉に何かが引っかかる感じがした。

「ああ、そうか。お前、自分の実力がジョルジオ、ジョージに追いついていないって感じてんだろう。そんな感じがするぞ」

(ああ、そういうことか)

彼の疑問は晴れた。だが、そのことで、また違う曇りを見せていた。

確かにそうだ、この上司に、彼に何度助けて貰ったことだろうか、何度足を引っ張ったのだろうか、両手両足を使っても数え切れないほどだろう。そう考えついたクックマンは肩を落とした。

「自信を持ちな、クックマン。俺もそう感じたことは何度もあるし、実際そうだ。逆にこいつと張り合えるのはバラライカの姉さんぐら이다ぞ。そんなことで悩んでいても無駄だ、無駄。

それにな、こいつが中々良くやる奴って評価してんだ。普通の奴はそんなことを言うどころか、評価すらしねえ。何度も言うが、自信を持ちなクックマン。お前は中々良くやる奴なんだからよ」

ニツ、と笑った風の瞳は、始めて出会ったときと変わらず、爛々と燃え上がっているようだった。



第三話 その男の父、昔の友人と出会う（後書き）

前回同様、所々出ているんだけどなあ、原作までの道のりが……！

アドバイスを宜しくお願いします。

第四話 その父、仕事をする グロテスクな表現有（前書き）

今回はグロに注意です。

どうしても入れたかったものですから、我儘で申し訳ありません。

グロ無しのバージョンが読みたい方は感想に書いて頂きたいです。

本当に申し訳ありません。

では、どうぞ。

#### 第四話 その父、仕事をする グロテスクな表現有

『こちらナッツレイ。配置完了しました。応答願います』  
『こちらクックマン、了解した。主任、全員配置に着きました』  
「了解」

インコア越しに聞こえる部下たちの会話を聞いたジョージは、淡々と返答する。すでにスコープから五十嵐重工本社ビルの玄関先を獲物を狙う鷲の如く、睨んでいる。後は、あの裏切り者のロイベルツを殺すだけであった。

ナッツレイ達はパワードスーツ回収のため、既に彼の隠れ家近くで待機している。いつでも突入できる状態であり、後は自分達の上司が突入を命令するだけであった。また、クックマンやその上司はロイベルツの暗殺を担っている。今回の作戦は民間人が多い場所に加えて、自分らの社の未来に関わる重要な作戦であるため、より正確に、より手早く行動できる必要があった。そのため実力が高く、経験が多く、連帯感の強い彼らが担うことにしたのである。

だからといって、ナッツレイ達が安全なわけでもなかった。ロイベルツが逃亡する際、その事件以前から彼の腹心の部下達が潜入している。武装も人員も十分であり、一人とて間諜は存在しなかった。その計画性と手際の良さ、そして選択した土地に人員に関しては、良点ではあった。

現在の日本は、数多くの大国、先進国が財政難に陥り通貨が不安定である中比較的安定しており、またその治安の良さから多くの外国人が日本へ移住し始めている。そのため日本という国では外国人とはそれほど珍しいものではなく、世界的にも日本語の教養が始まりだしている。しかし、大人数である場合はまだ比較的珍しいため人目に付きやすく、やはり奇妙がられる。

『主任、ロイベルツを乗せたハイヤーがA地点を通過しました。間もなく到着します』  
「了解」

先ほどまで触れてもいかなかった引き金に人差し指を当て、絞る。スコープには既にハイヤーの姿を捉えていた。見た感じでは分らないが、ロイベルツが狙われているという点を知っていることだろうから恐らくガラスは強化ガラスになっているであろう。いくら彼が手にしている銃が強力で凶暴なものでも、さすがに強化ガラスを突き破るのは酷な話であった。

ハイヤーが玄関前でゆっくりと止まった。ボーイが近づき、ドアを開ける。重役と思われるブクリと太った中年の男がハンカチで汗をふき取りながら汚い笑みを浮かべて車へ近寄ってくる。そして、ロイベルツの白髪だらけの頭が、視えた。

金属音。銃声。轟音。破壊音。

瞬間、ロイベルツの頭が砕けた。まるで卵の殻のような頭蓋骨が辺りに散乱し、カラカラと軽い音を立てて落ちていく。血と脳漿が辺りの地面を汚して、豪奢なエントランスを凶悪な色で塗り潰す。重役の男の頬には血と脳漿だけでなく、肌色の脳味噌がベッタリと粘り付いている。潰れて透明な液を垂れ流す左目とは対照的に、透明な放物線を描いて転がり落ちた右目玉は、偶然にも生氣無くジョージの方角を向いていた。

頭を砕かれたロイベルツの亡骸は、糸が切れた操り人形の様に膝から崩れ落ちていく。ドサツ、という落ちた音と共に五十嵐重工周辺の、止まっていた時が動き出した。

社員の悲鳴。重役の男は口から泡を吹き、気絶して倒れる。ボ

ーイは錯乱して、震えながら目的地もなく逃げ出した。ボディードはというと懐から銃を取り出して犯人を探している。野次馬達はガヤガヤと何が起こったのか蚊帳の外である。数名は携帯を取り出して、警察に連絡している姿も見える。そんな野次馬から、1つの影が飛び出した。

クックマンである。覆面を被り全身を黒い服である彼は、素早くロイベルツの元へ駆け寄った。

「クソ、奴を殺せ！ 撃て、撃て、撃ちまくれ！」

一人の男がイタリア語で叫び、命令を出す。腹心達は腹いせか、銃口をクックマンの方へと向けて発砲を始めた。しかし掠りもせず、そしてクックマンが撃つ銃弾は確実に心臓か頭を打ち抜いていく。ジョージの直接火砲支援もあつて、簡単に全滅させる。銃声一つ一つで野次馬達は悲鳴を上げるのが、どうにも耳に触るが。

たどり着き、すぐさまロイベルツのボディーをチエックする。そして、目的のものを胸ポケットで見つけた。

USBメモリーだ。世界を震撼させる技術、電子数学の財宝の情報がこの中に入っているのだ。

素早く自分の胸ポケットに入れて、道路へと駆け抜ける。それを群衆は悲鳴を上げて避けていく。その先には助手席が空いた車があった。

飛び乗って、ドアを閉めると車が動き出し始めた。しかし、ここで上司から言われた言葉は褒慰の言葉ではなく、驚愕のニュースであった。

「ナッツレイが裏切った。ミヨンは死亡。現在パワードスーツを着用し、こちらに向かっている。どうやら電子数学の財宝が目的ら



しい。焼け石に水みたいなもんだが、一対物狙撃銃（アンチ・マテリアル・ライフル）と一分隊支援火器（スクアッド・オートマチック・ウェポン）はある。それで迎撃しろ。本社より、捕獲ではなく破壊しても構わないとのことだ」

「はあ！？ それは一体……分かりました。すぐに迎撃体制へ移行します」

今は疑問を口にするときではない。それが目の前にいる上司の雰囲気から分かった。すぐさま車体の屋根部分を開ける。すると見えるのはあまり人がいない光景と、人の一回りか二回り大きな、人型の何かが迫ってくる。

「パワードスーツ発見！ 迎撃を開始します！ って、何じゃありや！？」

パワードスーツが手にしていた武器は、人間の何倍もの筋力を持つパワードスーツが両手で持つほどの質量を持つものであった。

エリア・ウェポン  
マシンガン 広域制圧兵器と呼ばれる武器の中でも、最も強烈で凶悪な ヘヴィー・  
重機 関銃であった。

今クックマンが手にしている分隊支援火器も広域制圧兵器の部類に入るが、その威力が段違いである。

分隊支援火器は口径5.56mmクラスに対し、重機関銃は12.7mmクラス。二倍以上もの口径の違いがある。まずここからその威力の差が伺えることだろう。対物狙撃銃も12.7mmクラスではあるが、その連射能力の差はかけ離れている。さらには分隊支援火器は一人で運び運用する兵器であるが、重機関銃は二〜四人程度での運用が前提である、まさに ヘヴィー・ウェポン 重兵器の名の通りである化け物だ。そのため普通は防御用として利用さえるのだが、パワード

スーツによって持ち運び可能となれば、攻撃用へと化けることが可能である。あれと比べたら、十分恐ろしい分隊支援火器も玩具同然であった。

「ちよ、主任！ 重機関銃持つてるなんて聞いてませんよ！？」

「はあ？ こんな時に冗談は止せ、クックマン」

「いや本当ですって！」

ジョージがバックミラーを見、手荷物ものを確認すると、顔色を変えた。

「なんであんな化け物を持つてるんだ、あいつは！？」

「主任、もつとスピード出して！」

「これがマックスだ！ イタリアのマッド・サイエンティスト狂科学者 どもめ！ F u c k、F u c k、F u c k！」

先ほどまでのシリアスが台無しである。

そして遂に、分隊支援火器の銃弾が切れた。しかしパワードスーツには多少の傷は付いているが、いずれも支障が出るほどのものはなかった。あの化け物に対抗できる武器は、対物狙撃銃しかない。

「しかし、撃ってきませんね、奴。メモリーの破損でも怖がっているんでしょうか？ それとも、弾数が最初から少なかったとか」

本社からの情報から、弱点と思われる関節部分を中心に狙って撃っているクックマンが半分敵の装甲の堅さに呆れながら上司に向かって疑問を吐露した。未だ、こちら側だけが撃っている状態にも呆

れてたのだろう。そう疑問に思うのは正常である。

「違うだろうな。銃弾の数が少ないのはもしかしたらありえるかもしれないが、あいつは僕たちを遊んでいるだけだ。僕らが止まったら最後、それこそ僕らを一生動かなくなるようにするだけさ」

淡々と答えるジョージの言葉の端々には、少々不満の色があった。やはり遊ばれているのが気に食わないのだろう。

「でも裏切りの場合も考えて、鬼ジョーカー札は持ってきた」

ニヤリと嫌らしく笑う上司の顔が自然と思い浮かべることが出来る。アレのことであろう、とその鬼札を知るクックマンは、身震いをする。

「本当は使いたくなかったんだけど、使うしかないかもねえ」

これは本当のことである。アレを使った後、上司への副作用も知ってはいるが、この状況下では使わざる負えない可能性は高い。

車は、明確な目的地を持って進んでいる。それを知らないのは、あの愚かな裏切り者だけだ。クックマンは今手にしている得物を持ち直し、撃つ。

ダンダンダンダンッ！

断続音と共にパワードスーツに火花を散らす銃弾。人ならその一撃一撃は必殺ではあるが、あのパワードスーツには羽虫程度にしか感じないであろう。

弾弾弾弾弾弾弾弾ッ！

揺れる車上で必死に狙いを振り絞りそのほとんどを中てる高度な技術を持つクックマンであるが、あの凶悪な武器を十全に使えていないナッツレイを殺すことは出来ない。

DANDANDANDANDANDAN!

そして、両者は決戦の場へと誘われた。片方は、必殺の一撃を求めた故に。もう片方は、緘滅の時宜を求めた故に。

(ハハッ、ゼツテエブツコロす。アイツら残さずブツコロしてやる！)

ナッツレイは裏切り者ではある。そしてこの突然の裏切りはこれは確かに幼稚ではあるが無計画な裏切りでは決してなかった。

何時から、と言われれば彼の、ジョージの班に入って間もなくの頃からである。

ある、名も聞いたことのない企業から誘いが来た。それは企業の情報自分達に流して欲しい、俗に言う企業スパイになって欲しいと言うものであった。当然ナッツレイは当初それを断っていた。その後暫くは無視を決め込んでいたものの、あまりにもしつこく何度も何度も連絡を掛けてきたため、大声を上げてもう止める、と怒鳴った。

すると、相手は一つ条件を提案した。

確かに、我々は君にしつこく連絡してきた。それは詫びよう。しかし、これに対しての報酬は君にはもの凄く魅力のあるものである。そう断言できる。だから、一回だけ直接会わないか？ それでも、どうしてもやらないというなら我々は手を引こう。しかし、君は必ず我々の提案に飛びつくであろう。何故なら君が必要とするものだ

から……

まるで何かの予言のように、呪いのように言われたその言を疑問に思いながら、渋々提案された会合場所へ行った。

そして、あの予言のような言葉の通り、ナッツレイはその提案を飲んだ。

母の、医療費全額である。

元々病弱であった母は、働き手である父が亡くなった後、女手一つで自分を育ててくれた。しかし、やはり無理をしまい、床に伏してしまう。それからというもの、己の手を汚してなんとか生活費を稼ぎ、母の医療費も貯めた。一流企業と謳われた会社にも入社した。しかし、治すまでの医療費には手が届かない。母も衰弱していく一方であった。

そこに、彼らの報償である。飛びついて契約を交わし、彼らの耳目と化した。

そして、上司と同僚の抹殺、そして電子数学の財宝の情報奪取。この二つの仕事が決めの最後の仕事である。

彼女などと周りから言われていたミヨンは、彼からしたら体だけの付き合いであった。彼女の考えがどうであれ、彼女の愛の深さがどうであれ、彼の一番は母であった。

上司も同僚も、彼との交流は浅い。それにあれほど幸せに暮らしている上司なぞ、殺したくて殺したくて仕方がなかった。気が引ける所か、喜々として受ける内容であったし、その後の自分の身の安全も約束した。ならば、仕事を請け負う他はあり得なかった。

己の前を走る車が、廃工場へと突っ込んでいく。扉はガラんと全開で開いており、全く彼らを引き止める障害物はなかった。スピードを緩めず、ブレーキを踏まず、ただただひたすらに、馬鹿のように前を進み行く車を見て、ほくそ笑んだ。

（ハン、そこはチェック済みだぜ。行き止まりだ！ ドアも全部障害物で開かないようにしたから、逃げ道はねエ）

地帯周辺をチェックしていたナッツレイは、この辺りの情報は頭に詰まっていた。故に、この後どのように殺そうかと、既に計画を立てていた。

車のエンジン音が止まる。工場の奥の方で止まったからだろうか、集音声の高いパワードスーツでも音が小さく聞こえる。

手に持つ重機関銃を一瞥する。ナッツレイはスマートな兵器を好き好んで使っていたため、どうも使い勝手が悪い。それに銃弾も少なかったため、確実に殺そうとわざわざ今の今まで撃たなかったのである。しかし、今の奴らはまさに袋のネズミだ。一掃するチャンスでもある。

銃を持ち直し、機会音を立てながら歩き出す。人間以上の視聴覚を利用して一上司と同僚（獲物）の搜索を開始する。重機関銃の銃口は面を上げ、いつでも発射できるよう引き金にも中指を当てる。

首と足が動く度にウィーンウィーン、と音が鳴るのが難点ではあるが、見つけた瞬間に敵を殺すことが出来るのは確かであった。

パパパパンツ、銃声と共にパワードスーツの周りで火花が散る。そう遠くはなく、確実にこちらを狙っているものであった。音源の元の方向すら分かる性能に舌を巻きながら、銃声のした方向に駆ける。車を追うときほどの速度ではないが、初速から既に人の領域を逸脱しているのは変わらない。

銃口を音源の方向へ向け、50口径の、人を殺すには過剰な威力の凶弾が掃射される。ボロボロのコンクリート、放置された灯油缶、錆びた鉄骨の悉くが穿たれ、壊され、崩れていく。掃射が終わり、煙が晴れるとまるでアニメのチーズのような穴だらけの無惨な残骸の数々が目にとれる。が、血肉の類は映らなかった。少々残念がりながら、だが段々と面白くなってきたナッツレイは、まさにゲーム

の中の主人公のような心境であった。

道を辿れば、通路は二つ三つあるが、一つ以外は行き止まりと分かる。勿論、そんな道を選ぶはずもないのでその一つを進んでいく。老朽化が進んでいた建物であったためか、パワードスーツが一步進む度にその重量に耐えきれなかった地面のコンクリートが砕けていく。そんな仕様もないことに笑いながら、一歩一歩確かに進んでいく。

廊下を抜けると、広い空間があった。材料を置いていたところであろうか、コンテナもちらほらとある。しかし、ナッツレイはそんなことに目も止めず、ただただ前方を凝視していた。そこには、あの怨敵が整然と佇んでいたからである。

「ジョージ!! ハニーサックル……ッ!」

「いやはや、味方の、部下の裏切りなんて予測しておくものじゃないね。まさかとは思ったけど、本当に裏切るなんて思いも寄らなかった。ナッツレイ、君は何故裏切った?」

「ハンツ、そんなの今から死ぬテメエには関係ネー話だろうが。罅り殺してやるから、楽しみにしてオケ」

大きく穿たれた穴口が、正確にジョージを捉える。ガチャ、ガチャ、ガチャ、と歩き、少しずつ距離を詰めていく。ナッツレイは端正な顔付きで獰猛な笑みを浮かべて睨みつけるが、それに対して、ジョージは特に顔に表情の変化はなく他人事を見ている傍観者のようであった。

そして、引き金を引こうとした時、突如爆発音が聞こえた。

アンチ・タンク

対戦車 ミサイル、ロケットランチャー、そして

「クックマンか!」

着弾する。さすがに、パワードスーツとはいえ対戦車ミサイルを食らったらひとたまりもないので、思わず唯一の武器である重機関銃で受けてしまう。爆発すると同時に、銃身は真つ二つに折れ、既に使いものにならなくなってしまったことが一目瞭然だ。

爆風をもろに受けたナッツレイは倒れていく。それに耐えきれなかった脆いコンクリートが沈み、パワードスーツの足が埋もれてしまう。ふと、嫌な予感がしてジョージの方を見る。あの上司は口端をつり上げて、邪悪な笑みを浮かべている。そして何より、ナッツレイの目を引いたのは右手だ。その手の中にあるボタンを高性能カメラで、捉えてしまった。それは、彼自身も見覚えがあり、よく使用する武器の操作装置であった。

「ボタン  
Fire  
」

アンチ・タンク  
対戦車用地雷。現代の各国列強の主力戦車ですら破壊が可能となった地雷は、あの堅固な装甲を全身に纏うパワードスーツですら、それこそ対戦車ミサイル以上の威力を持つこの兵器は、あまりにも凶悪であり国際法で戦争の使用を禁止されるほどのものであったが、今現在行われているのは戦争ではない。誅罰であった。

ジョージはそのボタンを迷わず押す。すると瞬間、地面が爆発した。それも、ナッツレイがいる辺りを中心に広範囲で、しかし彼らに一切の被害がぎりぎりない辺りまでである。

所々で炎が上がり、爆発で地面が割れ、舞い上がったあの脆弱なコンクリートの散弾がナッツレイへと降っていく。無数に、無秩序に、そして自分自身と同じく 無慈悲に。

この罠を仕掛けておいたのは、この地に降りて直ぐのことであっ



た。なにやらスパイが潜り込んでいるので注意を、という『ヴァルキュリエ』の忠告を聞いたジョージは真っ先にこのことを頭に思い浮かべていた。

とはいうものの、電子数学の財宝なんていう貴重価値の高いものをそれを知るスパイが見逃すはずがない。情報を流し、他の人員に報せるやもしれん。可能性としては自分の班に紛れ込んでいる可能性が高いということまで彼は考えていた。

ならばパスワードスーツ対策としても、重火器の数々は欠かせないとして分隊支援火器や対物狙撃銃、先ほど放ち、爆破させた多くのエクスプロジブ・ウェポン爆発兵器、対戦車ミサイルや無線型地雷などを持ってきた。その約半数は意味を成さなかったわけだが。

爆発によって、多くの残骸の下敷きとなったパスワードスーツを見下す。今見えるのはその千切れたパスワードスーツとナッツレイ自身の右手のみであった。

なにを思って、ナッツレイが裏切ったかは知らない。それに、そんなことはどうでもいいことであった。

裏切りは、最大の悪。それこそ企業の『裏』に入ってきた社員がまず始めに教えられることだ。

『裏』に入ってくる社員のほとんどが、過去に、今に、未来に何かがある者である。

それが何かは知らないし、闇雲に話すほど薄っぺらい内容のものな訳でもない。だが、それらは全ては他人からすれば平等に無価値だ。

企業としても、そんなことはどうでもいい。彼らが欲しいのは、ただただ忠実で優秀な、手駒であるから。

優秀性はセンスによって変わる。だから二の次三の次だ。才能の無い奴はいらぬから、精捨捨て駒程度にでもなってくれ。その程度のことだ。

しかし、忠誠心は違う。裏切れば壮大な損失があるのは間違いないことで、勿論企業はそれを望まない。だからこそ、絶対に裏切らない社員を求め、それを一番最初に教えることとなったのだ。

だからこそ、裏切り者には死、あるのみ。裏切りの末路が、この変死体となったであろうナッツレイであった。

「……クックマン、行くぞ」

「はっ」

そうして二人は離れていった。

二人が離れていき、暫く経った頃。工場の、爆破され悲惨な状況となったあの広場で、コンクリートの山の中から一人の男が這いずり出てきた。

ナッツレイである。

利き腕である右腕は、肩からもげており目も当てられない状態となっていた。

そんなことはいざ知らず、不安定な足取りで歩み始めた。一步踏み出すごとにフラフラとしていくが、確固たる意志で歩みを止めずにいた。

工場から少々離れたところに、廃ビルがある。ここら一带は以前は盛んあったが、古い建物が多かったため一気に再開発しようと思いが直々に買い取った区域であった。実状は、ただ単純に騒音や異臭で近隣からの苦情が相次いだためである。買い取ったのは良いものの、無計画に買ってしまったため予算が合わず、再開発など夢のまた夢なので放置している。そのため不良や、あまり合法的ではない

ことをするにはもってこいの場所であるため、あの契約者との会合も、この仕事後はここで行うことにしていた。

廃ビルの入り口にある立ち入り禁止の看板を無視して入ると、三つの影が見える。

「あら、無様な姿ね」

幼い、少女の声だ。鈴の音色のような声は不思議と廃ビルに響いて聞こえる。目を凝らせば、両脇のダークスーツのボディガードの中心には黒い服を着た幼女がどこから持ってきたのか、豪華な椅子に座っていた。

「利き腕を失ったのに相手には傷一つも付けられなかったのにも関わらず、のこのこと私たちの前に来れるのは、随分身勝手な話じゃないかしら？」

「……ウルせえ、さっさと保護しろ」

「あら、失敗したのにな？ あの二人は殺せなかったじゃない」

「電子数学の財宝の情報が入ってるUSBメモリーはある！」

ナッツレイが吠える。懐から取り出した、棒状のプラスチックのUSBメモリーを見せつけた。もう一つの仕事は達成したのだ。だから保護される権利はある、とさも自分が正当だと言わんばかりに突き出した。

「あら、凄じじゃない。でも残念ね」

パアン、聞き覚えのある銃声。それがボディガードの持っている拳銃から聞こえた。否、聞こえた頃には、ナッツレイは今度こそ死んでいた。その光景を冷たい視線で蔑みながら冷然と言い放つ。

「裏切り者は、いらないわ。一回裏切つたらいろんな所から信用がなくなるのよ。後世では気を付けることね。ああ、それと貴女のお母様、とっくの昔に死んでるわよ？ 包帯ぐるぐる巻きにして、誰でも良いから適当に寝かせてたらバレないものね」

顎を使って、男にUSBメモリーを取らせに行かせる。男が拾おうとすると、またもや銃声が響いた。今度は、入り口の方からだ。男の頭は碎け散っている。だが、幼女はその大の大人でも吐き気を催す光景を見ても、顔を一つも動かさずにいる。

「それは、渡せないなあお嬢さん<sup>フロイライン</sup>」

銃口を幼女に向けながら、ジョージはそう言った。

「初めまして、<sup>シエントルメン</sup>紳士殿 ジョージ・ハニーサックル。お会いできて光栄だわ」

「初めまして、お嬢さん。僕も光栄だよ、かの亡国機業の幹部殿と会えるなんてね」

あら、とさも驚いているようにおどけながらころころと幼女が笑う。

「お母様からこの前譲らせたばかりなのに、そこまで知ってるなんて、さすが戦闘幹部のエースね。なら、この状況もわかってるでしょ？」

ザッ、と影から二、三十人ほどの男たちが現れる。その全員が何かしらの武器を持っており、銃口を、切っ先を、分銅を向けていた。

「さすがに、僕一人じゃ精精貴女と道連れ程度が限界だけど」

「俺が参戦したらどうなっかなあ、いつちょ試してみるかい、嬢ちゃん？」

凰 恩来である。その姿は大柄で、筋肉が浮き彫りに出ている料理服のままだが、右手には刃渡り15cmほどのサバイバル・ナイフを、左手には中国軍製の最新の銃を手にしていた。

「あら、あの巨人も一緒にこちらが全滅ね」

「お、随分昔のことも知ってたんだな嬢ちゃん。その名前で呼ばれたのって、大体五年前だぞ？」

「あなた、自分が考えている以上に有名なのよ？」

引き上げる

わよ、さっさと動きなさい！」

パンパンと手を鳴らして、引き上げる指示を出す少女。それに従って、部下たちもまた動き始める。

二人も一瞬すら目を離さずに警戒をするが、こちらに敵意を向けずにはいても銃口や切っ先を一切こちらに向けない。たとえそれが撤退作業中だとしても、だ。ここにクツクマンを連れてこなくてよかったとジョージは思った。正直、空気に飲まれて足手まといになっていただろう。周りの取り巻きにもだがなにより、

「じゃあ、またいつか会いましょう。さようなら」

そう挨拶をして、暗闇の中へと消えていった少女に。

「……李、お前の目からしてあいつらはどうだった？」

「そう気負いすんなよ。亡国機業だろ、仕方がねえ。ずっと昔っからあいつらは行動してたんだぞ？ 企業も中々古いし『裏』じゃあ強い方だが、あいつらにゃ負けるさ。何せ、暴走するまではこの世界を操ってたんだからな」

亡国機業。第二次世界大戦中に出来、今の今まで生き延びている、戦闘組織。

彼らの企業の上層部は、亡国機業を戦争によって儲けた商人たち、つまりは武器商人や鉄鋼工業、石油会社にはたまた科学者達が秘密裏に作り上げた組織であり、世界を混乱に陥れることが目的であり、そのためにそれらの組織からのお裾分けがあり、新型の兵器、燃料、食料、資金が分けられており、今もなお活動していると考えられている。

「まあ、情報死守できたんだし、上等じゃあないのか？」  
「……うん、そうだね。そう思うことにするよ」

ジョージ・ハニーサックルは胸に蟠る感覚を不安しながら、その感情を押し殺した。  
無惨な状態であるドアから流れる冷気が心地良くも、不安を高まらせた。

「何か、嫌な予感がする」

その予感は、二十三年後を予期しているとは思わずに。

**第四話 その父、仕事をする グロテスクな表現有（後書き）**

ということ、この作品の敵が遂に現れました。いや、これ以外にもありますけどね。

感想・評価・アドバイス等を宜しくお願いします。

## 第五話 その男、生活が変動する

そんなことがあったとはいざ知らず、スラッダーとその母マリーは日本へと引越しを完了していた。そこにはジョージがいたし、そこには元々ジョージと一緒に日本へ来ていたクックマンやアメリカから母子の手伝いをしていたチャールズもいた。共通点としては、皆汗だらけになっているという点であろう。

「あちい、日本ってのはこんなにあちいのかよ？ つうか、メチャクチャ蒸し蒸ししてんな」

そう不満を零したのは、この中で一番（精神的に）若いチャールズであった。最近結婚したというのに仕事とはいえ、こんな極東にまで連れてこられたのには少々向う腹を立てていた。

「だから薄手の服を持って来いって言うってただろ……」

黒の半袖シャツと薄茶色のスラックスの清潔感がある服装をしているクックマンであるが、彼もまた汗で服が濡れている。とはいっても、シャツが黒色のため汗の跡は見えないのは、彼が考え抜いた工夫ではあったが、その分光を吸収して熱い。

「ほら、まだ残ってただから手を止めるなよ」

パンパンと手を鳴らして話をしている男達を注意するのは、ジョージであった。彼は彼で、短パンに肩無しの白いシャツを着ており、光が反射して彼の方を見ると目が痛い。確かに、見てみればまだまだ荷物が山のようにある。この建築物は企業が購入したものだ。彼らの部署が作られることが決定したのが突然であったため、土地は



購入したものの日本支社の大型ビルは現在工事中であり、その間の仕事場がこのビルである。

しかし先ほど言ったように部署の設立は急だったため、その分の人員も十分に確保出来ておらず、現在ここにいるメンバーに四、五人ほどが来るだけであるため、実は大きすぎるくらいであった。

部屋も多く残ってしまうので、ならばいつそのこと空いている階、部屋で暮らそうとジョージは決めたのである。これに習い、クックマンやチャールズ一家もここで住むことにし、まずチャールズが帰国し引越しが終了後、クックマンが、という方法を探ったというのは余談だ。

現在男性グループが運んでいるものは、データにしておく和不味い書類やパソコンといった他人に見られると少々厄介なことになるものが入っている段ボールを中心に、見られても別に支障の無いものや、生活上必要最低限の物資である。しかし、その書類の量が大量に、しかも圧縮して敷き詰められているため、鍛え上げられている彼らの筋肉でも一苦労するほどの重量であった。

それに比べて、マリー・スラッターグループは小物などを中心に運んでおり、家具などといった運びにくい物は業者に頼んでいるため比較的楽である。とはいっても女子供であるため、それだけでも十分に辛い。特にスラッターなんかは精神面ではこの中で一番取っているが、肉体的には三歳であるため荷物を一つ運んだだけで休憩を取らなくてはとても厳しい。実際は別に運ばなくても良いと周りには言っていた。しかし申し訳ない気持ち湧き、心を傷つけるため参加させて貰った所存である。

「そっいや主任、日本には引越しの後にソバを食べる習慣がらしいですよ」

「ああ、引越しソバとかいう伝統か。そうだな、これを運び終わったら食いに行くか」

「そうしましょう、それがいい」

「……」

引越し蕎麦の本当の意味を知るクックマンはというと、沈黙を守っていた。別に言ってもよかった物の、もし自分が実は日本マニアなどと露見したら馬鹿にされるであろうと予知したためである。

本当は、言いたい。間違いを正したい。そんな感情の渦に体を震わせながらも、黙々と作業を続けていた。ついでに言えば、スラッダは前世引越しなどといったことは一度も無く、また近所付き合いなぞ一切無かったためその手の常識については聞き覚えはあるが、その意味は知らないといった、少々常識が無かったりする。

雑談を交えながら作業を続けていると、日は既に暮れかかっていた。

「うん、大半の荷物は運び込めたし、今日はここまでにするか」

「……主任。とても重要な用事を忘れていました」

「ん、なんだい？」

「挨拶回りです」

「「あ」「」

気付いた彼らは、すぐさまビルへと駆け込んだ。

「日本語がお上手なのねえ。この辺りにも外国の方って住んでいるんだけど、正直日本語はあんまり上手くないのよ」

「ははは、いや子供の頃に少々噛んでいたものですから。他の家にも挨拶をしないと行けないので、ここら辺で」

「あら、引き留めちゃってごめんなさいね。なんか困ったことがあったらいつでも聞きに来ていいからね」

「ありがとうございます」

ハニーサックル一家は一礼すると、隣の家へと向かった。

ジョージは内心驚いていた。治安が良いのは既に感じていたが、住人達との接触は無かった。各国の評判では日本人はあまり見知らぬ人や外国人との会話を嫌うと聞いていたが、今まで巡った家でそういうことがあったのは精精一、二軒とごく少数である。他の国も大体そのようなものであるから、取り立て騒ぎ立てるほどの内容ではなかった。もしかしたらこの辺りの地域だけが例外なのかもしれないが、それにしてもオープンである。

最後の家へと着くと、インターホンを押した。ピンポンと音が鳴り、家の中から小走りする音がする。

「はいはい、今開けますねー」

ん、とジョージはその声を聞いて既知感に襲われる。ドア越しに聞こえる声は確かに以前聞いたことがあったものであった。ドアが開くと、成る程、確かに聞き覚えがあつて当然の声である。何故なら、一週間前に取引したばかりだったからだ。

「織斑副所長、ですか？」

「あら、ハニーサックルさん。お久しぶりです」

織斑宇宙工学研究所副所長 織斑 百春<sup>ももか</sup>が、そこにいた。

「しかし偶然ですね。まさか引越し先のご近所には取引先の、しかも重役の家があるとは」

「ええ、私も驚きました。こちらが奥様ですか？ 初めまして、織

斑 百春と申します」

「初めまして、織斑さん。マリー＝ハニーサックルです」

流暢に両親が百春と話していると、どうやら百春がスラッダーに気付いた。

「お子さんがいるんですか？ 私たちの娘と同じくらいに見えるわね」

「初めまして、スラッダー＝ハニーサックルです。三歳です」

まだ舌足らずであり、あまり日本語を話すには向いていない骨格ながらも辿々しく自己紹介をする。

驚いて目を見開くと、手で口元を隠して、微笑む。何か、可愛い物を見るような目つきであり、スラッダーは無図かゆく感じてしまった。

「日本語を喋れるし、それに上手いのね。私たちの娘と同じ年齢とは思えないわ」

そうであろう。彼の精神は熟しているし、なにより元日本人であるから当然のことと言えるが、そのことを知らない彼女らには驚くに十分のことであった。

「ちょっと待ってて下さいね。うちの娘も挨拶させないと」

彼女は振り返り、家の奥へと向かっていく。何やらその奥の方が騒がしくなり、一気に静かになった。

百春が現れたと思うと、先ほどよりゆっくり歩いている。彼女のスカートに、何かがしがみついているようだ。

「ごめんなさいね、うちの娘ちょっと人見知りする方で……」

「いえいえ、そういう子も世の中たくさんいますから」「すみません。ほら、挨拶しなさい」

ゆっくりと、スカートから顔を半分ほど出して、小さな声で呟いた。

「織斑、千冬でしゅ……かんじやった」

彼女、織斑 千冬との非常に微笑ましい邂逅であった。

さて、織斑 千冬との出会いから数分ほど立ち話をした後、ハーニーサックル家は帰宅することに決めた。女性陣は渋々といった感じであり、止めどなく話させたら一、二時間は軽く話し合えると思えるほどであった。

あの挨拶から千冬と自己紹介した少女は一切喋らず、スラッダーの父母の質問にも首だけで返答していた。それから暫く、彼女は穴が空くほどまでにスラッダーのことを凝視している。現在もまだ、見ていることがバレないようにと隠れながらスラッダーを見ている。途方に暮れたスラッダーは、どうしたらいいものかと内心首を捻っていた。前世では幼年時代から死ぬまで独りぼっちで過ごしていたためスラッダーにとっては、まさに未知の領域であったのである。しかも大の大人ならまだしも、まだ年端もいかず人見知りをする幼女相手に強めの言葉を投げかけるのも酷だ。ならばいっそのこと無視しようかと思っただが、この背に走る何とも面映ゆい感覚は懲り懲りである。

そんな状況下で帰ることにしたのは、彼にしては天の救いに近いものであり、英断した父には感謝しきれなかった。

さて帰ろうと、彼らが彼女らに背を向いた。

「また、こんど……」

今にも消えそうで幼い声の見送りの言葉が、後方から聞こえてきた。勿論、現在この家にそんな声を持つ人は一人しかおらず、またそれを特定するのは誰にでも出来るようなことである。そしてそれを言われて返答しないのは、誉められたものではないし、常識に反する事である。

「うん、また今度」

顔だけを彼女に向けて、別れの、そして再会の挨拶を交わす。それはそんな大層な内容でもなければ、別段珍しくもなく常人なら当たり前の事柄である。

だが、そんな当たり前なことが彼らにとっては掛け替えのないものに感じた。それは毎日のように親愛を抱く家族と交わすもの以上に、幼稚園で顔が知れている同級生と交わすもの以上に。

スラッダー、千冬両者共々に、この出会いと別れは、あまりにも深く、あまりにも濃いものであった。

さて、ひと段落着いたところでハニーサックル家はスラッダーに幼稚園へ行かせる方針を随分前から固めていた。とはいうものの

「……………」

「そうムクれないの、スラッダー。すぐ近くなんだから、ね？」

「そうだぞ、今のうちに友人を作っていた方がいいぞー。父さん、失敗してハイスクールまでなんかきこちなかったのをよく覚えている……なんであの時あんな事言っちゃったのかな……………」

「あなた、こつちに戻ってらっしゃい」

彼自身は断固拒否していたが。

友人とか、そういつた深い人間関係は一切不要であった。彼からすれば、確かに現在の両親からの愛情は心地よいもので享受してきたいとは思うが、それ以外の対人関係を育むよりは研究をしている方が有意義であると前世の記憶を含めてそう判断していた。

小中学生の頃は行間休みは一人でいたが苦痛は感じていなかったし、実験が出来ないのは辛い、研究の構想を組み立てられていたために逆に快樂であったと言える。それならばパソコンの使用が特に禁じられていない自宅にいる方が断然良かった。

と、いくらこの両親に反論しようとも決定は覆らずに、渋々行く羽目になってしまったわけだ。そのため現在スラッダーはせめても反抗ということで、黙り込んでいるのだ。とても幼稚な行動ではあるが、それ以外思いつかなかった。しかし、両親には劇的な威力を發揮しているのも確かである。

「……ごめんね、スラッダー。勝手に決めちゃって。でもね、ダーリンの人生を聞いていると「え、僕？」とても悲しい気分になるの。……」それにね、人が生きていく上では友人は必ずって言えるほど必要になっていくから、今のうちにその力を作っていて欲しいの」

切実な願い。というほどのものではないが、自分の息子、つまりは自分に対しての心配は感じることは出来る。なにより、久方ぶりに感じた愛があった。愛がなければこんな事は言えない。

真摯に訴えかけてくる、自分と同じ青の瞳と視線がかち合う。

承諾するしかあるまい。内心ため息をつきながらも、どこか楽しみにしている自分がある。なにせほとんど初めての経験と言っても過言ではないし、なにより興味が湧いた。もしかしたら、あの少女と同じ感覚を抱く人がいるかも知れない。そんな気分であった。

「分かった。行くよ」

たった二文だが、十分両親を安心させるものであったのは書くまでもない。

すでにどこの幼稚園に行くかまで決めていたらしく、了承した翌日から行くことになっていたのは当日になって分かった。珍しくスラッダーが怒声を張り上げたのは余談である。

ムスツ、といかにも機嫌が悪そうな表情を浮かべながらスラッダーは前方を睨んでいた。理由は勿論、朝に行くことが突然知らされたからである。さすがの彼でも数日ほどの決心する時間は欲しかった。彼はあくまで生活破綻者であり、別に性格破綻者な訳ではない。時刻は八時四十分。あと二十分ほどで幼稚園が始まる時間帯に、彼はマリーと同伴で園長室にいた。

人が良さそうにニコニコと笑う翁は、スラッダーを見て首を二度ほど振るう。

「君が、スラッダー君じゃね？ 初めまして、園長じゃ」

心中で「名前は？」というツッコミをいれてしまうのは、致し方がないことだろう。彼だけではなく、これを聞いていた教職員ですら初めての時はツッコんでしまったからだ。

髭をさすりながら再び相づちを打つ。



「うむ、空気は尖っておるが、いい目をしておる。すぐにみんなと仲良くなれると思うぞい」

前世では死んだ魚のような目と揶揄されていたのとは大違いだ。そう皮肉りながらも黙って園長の話に耳を傾ける。とは言っても三歳児に話すことなんてその程度しかなく、後は両親への話だけである。

そんな話を聞いていても退屈なだけで、しかし母への怒りというか鬱憤というか、そういうモヤモヤとした感情だけが蓄積されているので、そういったものを一旦リセットする意味も込めて窓から晴天の空を見た。

相も変わらず、広がっている青い空にポツポツと白い雲が浮かんでいる。だがそんな代わり映えもない空が、彼は好きだ。そして今もなお憧れている。

否。正確には、空のその先に恋い焦がれているためその通過点として空が好きただけだが、それでも十分に愛といえる感情を抱いている。

幾度となく手を伸ばした。幾度となく背を伸びした。幾度となく飛び跳ねた。

しかし、届かずにいた。

それが、よかった。自分にも不可能なことがあると認識させて貰える空こそ、彼の恩師であった。

だから多くの不可能を可能にした。だから多くの未知を既知にした。

でも、あの空の彼方にはまだまだ、無数の不可能も未知もある。故に、憧れは増すばかりであった

## 第五話 その男、生活が変動する（後書き）

ということ、織斑家との邂逅でした。ヤヴァイ、誰にフラグを立てようか考えていない金が必要。……別に要らないっすよね？

感想・評価・アドバイス等を宜しくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2347x/>

---

【習作】 IS～インフィニット・ストラトス～ その男、定義を破壊するもの

2011年12月11日15時49分発行